オレにも言わせろ！

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

Vol.82

適切な医療機関に行ってくださいね♡



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

鉄鋼の町であり、転炉スラグが産出される室蘭は父が生まれた場所だ。祖父はGHQが言うところの寄生土地所有者（不在地主）で、農地の半分以上を強制売却される前は転勤族の国鉄職員だったので、全道各地で生まれた父の兄弟たちは、出生した場所や就学した場所で新天地開拓の希望に胸をふくらませていた。

でも不思議な話だ。農地は農業生産者にとって財産であり、作物を栽培するのに大地から託されたな賜物でもある。それを1反当たり5円だったか10円で強制売却され、20年間の分割受け取りは、ただ当然で召し上げられた祖父や父なのだから頭に来るのが道理だ。普通の精神構造だったら反米、それを画策し、利用した戦後の日本に反旗を翻してもおかしくないはずだ。

しかも、父は日米安保騒動、ベトナム戦争を見聞きして減反政策を経験しているのに、反米の「ha（は）」の字も聞いたことがない。それどころか**「米国のおかげで今の安定した社会があり、とても感謝している」**とマジ顔で話していたことを子供ながらに覚えている。その遺伝子を持つヒール・ミヤイなのだから金髪・ブルーアイが大好きになるのは必然である。（詳しくは「ラデジンシキー」「和田」で検索してください）

それに引き替え、GHQが言うところの農地解放で多くの利益を受けた者が反米や嫌米発言を恥ずかしくもなく公言する。日本人としてのみならず、人として恩をあだで返すその姿勢はマトモなのだろうか。

昨年の春から室蘭の国立大学の工学系に入学できたのだから大喜びのはずの、東京生まれ、東京育ちの甥っ子がイマイチ、テンションが上がらないと妹から聞いていた。一度様子でも見ておこうと思っていた矢先、別用も重なり、室蘭に出かけることになった。

昨年10月14日の午後、胆振（いぶり）総合振興局で行なわれた**遺伝子組み換え（GMO）の意見交換会**に傍聴者として参加した。発言者は農協関係者、納豆屋、給食関係者、消費者団体であった。

このGMOに関する意見交換会には過去10年で10回以上参加しているが、意見交換会という名前の予算消化作業以外の何物でもない。参加者は恥ずかしげもなく、2000万t以上のGM作物が輸入されている現状を無視した反米発言を平気で口にすることができるのだから、もしかしたら戦後の農地解放でおいしい思いをした関係者のご子息なのかもしれない。

米国でも野菜のGMOはないと記憶している。その存在していない作物を北海道の野菜生産者に意見を聞いて意味があるのだろうか？　米国の野菜生産者にどのようなGMOが必要と

思うか?と尋ねる意見交換会であれば、予算の使い方や将来の社会的な意義を見出すことができるのだが、道庁から声がかかったからというだけで白いハンカチを腰につけてフリフリやって来ることに、自らが疑問を投じるべきである。

農協関係者の発言は毎回ドン引きだ。いつもGM作物栽培には反対の姿勢だが、畜産組合員が購入する飼料のほぼすべては輸入されたGM作物を利用して、道内のみならず首都圏にも安全・安心の北海道産ブランドとして牛乳、牛肉、豚肉を販売できるのだから、**ウソも100回言えば自分の言葉に騙されてしまう**のだろう。まるで大人は企画物のソフト・オン・デマンドの安全・安心なエロDVDを見ても良いが、高校生はダメと言っているようなものではないか?

給食関係者は「子供たちには安全なものを食べさせたい」と言う。さらに慎重に耳を傾けてみるとGMタンパク質が検出されない大豆油であること、米国嫌いが好むカナダ産の菜種油のほぼ100%がGMO由来であることや、給食に用いられる加工食品にはGM作物由来のものがあることは理解しているのだから、マンザラの天然系ではなさそうだ。

納豆屋さんはやはりGMO栽培反対だったが、面白い話をした。この方は「**米国産大豆のほうが十勝の大豆よりも品質が良い**」と明言したが、誤解してはいけない。十勝の大豆が悪いと言っているのではない。工場に納入されて豆腐や納豆に用いる大豆が毎回、大きさや糖分、乾燥具合、水分吸収率が変わっていては、一定の品質の商品を作ることができないのだ。たとえば十勝のあの人が作った大豆は良い!と言ったところで所詮100t程度の話で、1993年の大冷害が来たら同じ生産者の収量は1/10になってしまうのだ。

米国産を用いれば、ある一定以上の品質を保った大豆を大量に、数字で言うならば国産の4倍以上の輸入大豆に食指を伸ばすのは**流通・加工業者としては当然のこと**だ。それが50年以上も続いているのだから、統計と消費者判断は正しい。だからもっと収量が確約できるGM大豆を作って国内に安定供給することは決して間違いではない。ちなみに小麦も同じ状況にあると製粉関係者が内情を暴露したこともある。

などといつものハンカクサイ(アホな)たわごとにあくびを堪えて聞いていてもつまらないので、大豆収穫をする明日の天気はどうかな~とスマホをいじっていたら、主催者の道庁の多田輝美局長から「**ミヤイさん何かご意見ありますか?**」となった。事前に発言できない傍聴者に同意していたのだから、まさかご指名いただけるとは思ってもいなかった。唯一の傍聴者である私にとりあえずお声がかかったので、慎重に言葉を選んで発言した。

「毎回毎回、無知で無垢な意見にはウンザリさせられます。それほど危機感を覚えるのなら、今日から多種のGM作物2000万tの輸入を禁止しますくらいのことは言えないのですか? 道産の農産物を増やす能力がなくて、その結果、食べるものがなくなっても、あなたたちが責任を取ってくださるのですよね? よろしくお願いたします」ってなことを言ったと思う。反論もなく参加者は黙ってうなだれて聞いていた。

同10月30日には同じようなGMOの意見交換会が札幌で行なわれた。この日はそばの収穫が予定されていたので、隣町の生産者がやはり傍聴者として参加することになった。

年間積雪が5mを超え、200万の人口を維持して、交通環境をある程度維持できる都市は世界でも札幌だけである。モスクワは寒いが、積雪は札幌よりは明らかに少ない。五大湖東部では雪は多いが、人口は30万人にも満たない都市ばかりでニューヨークの人口はモスクワ並みだがやはり雪は少ない。

72年には東京よりも15年以上早く無人改札化され、うるさい鉄車輪から静かなゴム式車輪の地下鉄を導入した革新的な都市でもある。よって人間も無駄に革新的な人たちが多い。

札幌の意見交換会の話に戻ろう。内容は先の室蘭と同じで、過去10年間、全く進歩の欠片もないことは、**無駄に革新的な人たちが消費者団体の活動にも一生懸命**だということでもある。ただこのような左翼団体の団結力は一枚岩ではない。ある消費者団体がGMOに反対と言えば、似たような組織も「はんたーい!」とは言うが、彼らが一致団結して行動することは稀である。

別に不思議なことではない。社会主義を含めた、いかなる国の核実験に反対の原水禁と共産党系で思想を同じくする「核実験は安心ですよー」の原水協の例からもGMO反対派の末路を見るようなものだ。

傍聴者であるはずの私と同じ年代の南幌町の生産者はオレにも発言させろ!と手を挙げたそうだ。そして、彼はこう言い放った。

「それほど安全性に疑いを持っていて心配だー、心配だーと言うんだったら精神内科に行ってカウンセリングを受けたら良いのではないか?」